湯殿山学における主なキーワードと思想

アンドレア・カスティリョーニ

Andrea Castiglioni

近世の湯殿山は、出羽国（現在山形県）の代表的な聖地であり、また日本における修験道の本部の一つであった。16 世紀半ばから湯殿山に特有な山岳宗教が生まれ、湯殿山は羽黒山、月山と共に出羽三山に含まれ、三山の奥の院として拝まれる存在となった。江戸時代の湯殿山信仰と関わる宗教的な現象を検討していくと、五つの主たる概念が頻繁に登場する。これらは湯殿山学のみならず、修験道学全般、さらには日本宗教学に関する解釈を深めるための大事な役割を果たすと考え、以下のような五つのキーワードを紹介する。

メトニミー・換喩

湯殿は、湯殿山と称され名前の最後に「山」という文字がある。しかし、実際には湯殿は聖なる巨岩である。この巨岩は、御宝前であり、それは山の概念を凝縮する役割を果たしている。それだけではなく、御宝前は湯殿の本地仏である大日如来と垂跡神の湯殿権現の媒介としての役割も持つ。これにより、自然物である御宝前は本地仏と垂跡神の融合するスポットの中心になり、大日如来と湯殿権現の融合をさせるための根本的な役割を果たす。湯殿山の自然環境を考える時に、文化と自然の対立が完全に消え、文化は自然になると同時に自然は文化になる。また御宝前は、湯殿の本地仏と垂跡神の媒介として働くのみならず、人間にも同じ役割を果たすことを意味する。つまり、御宝前という巨岩は、神と人間の間を取り持ち、人間が湯殿山というパンテオンと具体的に縁を結ぶための存在として機能する。御宝前をより深く理解するために、Paul Mus 氏（1902–1969）が考案した meso-cosmos（中間宇宙) という卒塔婆に関する定義について考えてみたいと思う。Mus 氏によると、卒塔婆がエレベーターのように働くことで、神を人間の世界に下ろし、人間を神の世界まで上げる役わりを担うと

している[1]。これと同じように、湯殿山の御宝前も如来や権現を人間の世界に下ろし、行者や巡礼者を神仏の世界まで引き上げる。御宝前は山の概念を持つと同時に、巨岩の持つ中間宇宙という概念をも象徴する。

トランスポジション・見立て

Jonathan Z. Smith 氏 (1938–2017) が、儀礼に関するトランスポジションの概念を分析している。Smith 氏は、儀礼の作用は、同類と異類のバランスを反転させ、あることは「これ」のみならず「それ」にもなることが可能であると述べている[2]。出羽三山の歴史を考えると、このトランスポジションのメカニズムがよく理解できる。熊野三山の信仰は鎌倉末期に、東北地方まで流布したが、紀伊半島まで移動できなかった東北の信者のために熊野三山のローカルバージョンが出来た。その熊野三山の見立てとしてのローカルバージョンが、庄内平野にある出羽三山となる。つまり、本宮・新宮・那智の聖なる土地は出羽国まで移動することで（トランスポジション）、17 世紀の初めには羽黒山・湯殿山・月山と重ね合わせ、二つの山岳エリアの本地仏と垂跡神は融合し、それぞれの場所に存在するようになる。しかし、トランスポジションは不完全な経過であり、常にバリエーションが生じる。例えば、熊野三山の本地仏信仰が出羽三山にもたらされた時に、本地仏の構造に若干の変化が生じた。特に、那智大社の本地仏である千手観音は、羽黒山に勧請されると、この山と既に深い繋がりを持っていた聖観音へと変化した。したがって、トランスポジションは想像力の貧しさではなく、柔軟性が高い宗教的な現象であると言えるだろう。さらに、トランスポジションには終わりがない。なぜならば、時間が経つと正当性を得たコピー（この場合には出羽三山）はまた自分の分身を作り出して、新しいトランスポジションを行う。例えば、17 世紀の初めごろに天台宗の天海（1536–1643）は、有名な巡礼地になった出羽三山の神仏を日光に勧請し、東北の三山の曼荼羅のような地理を日光のエリアに当て嵌めることをした。その結果、男体山は湯殿山、裏見が滝は羽黒山、石裂山は月山として、それぞれを見立てた（図 1）。つまり、勧請儀礼により修験者と僧侶は聖なる山々のネットワークを作り、月山の垂跡神になった石裂山が関東地方にある月山のローカルバージョンの役割を果たした。言い換えると、この現象は聖なる山の地域間に行われた「神仏習合」の一種類として解釈することが出来るだろう。寛永（1624–1644）には湯殿権現が関東地方の数多くの村にも勧

1. Paul Mus, Barabuḍur: *Sketch of a History of Buddhism Based on Archaeological Criticism of the Texts*, trans. by Alexander W. Macdonald (New Delhi: Sterling Publishers, 1998), 55–6.

2. Jonathan Z. Smith, ,“Constructing a Small Place,” in Benjamin Z. Kedar and Zwi R. J. Werblowsky, eds., *Sacred Space: Shrines, City, Land* (New York: SUNY Press, 1998), 1998, 18.

請され、神輿が地面に置かれたところは権現塚になり、ミニチュアの湯殿山と湯殿権現の分身になった。また、場合により塚のいただきには、精緻に彫られた胎蔵界それとも金剛界の大日如来の石碑が安置され、湯殿山大日如来は村の守護神として祀られた。

図1 勧請儀礼の後に月山と重なった石裂山の札、江戸時代、紙に墨、Andrea Castiglioni 所蔵

エンボディメント・救済の身体化

湯殿山は日本のミイラのメッカとしてよく知られている。なぜならば、高名な行人が死んだ時に湯殿山講の世話人は、石の匱という特別な墓に行者の死体を安置し、ミイラ（すなわち即身仏）にする儀式を行ったからである。湯殿山系の行人たちは、一世行人と呼ばれ、苦行をするために生きた半僧半俗の宗教的なプロフェショナルだった。一世行人の即身仏を分析すると、湯殿山の宗教思想と身体論、救済との深い繋がりを理解することができる。つまり、高名な一世行人の修行を支えるために湯殿山講員は、長年の寄付をし、自らがスポンサーとして支える一世行人の身体を長く養い支援した。その代わりに一世行人は仙人澤という湯殿山の麓にある行場で修行し、講員のために自身が得た徳を与えた。それは死後にも続き、講員たちが一所懸命に支えた一世行人の体を捨てずに、その身体を自分たちのカスタマイズした肉身象として保存し、即身成仏の身体的な可能性の根拠として仏壇の上に安置した。これを言い換えると、湯殿山講の世話人たちは、行者の体を支えながら、長年をかけて、行者の体のオーナーになり、行者の死後に、苦行で鍛えられたその身体を俗人の救済の生きる象徴として使った。このことから、即身仏と関わる時間の概念は過去に向いているのではなく、未来に向いている。さらに深く考察すると、湯殿の即身仏は過去に包含された未来像の視覚である。この未来像は、即身仏になった一世行人の身体に宿ることで、全ての人間が未来において成仏が出来ることを示すものである。一世行人の清めた死体を眺めながら、信者たちはこのような眼福を喚起し、自らの死後の運命のための徳を得た。さらに、一世行人は死ぬことで社会的な役割を止めるのではなく、口頭伝説と縁起の力でフィクションの経過を経て、人間の世界との触れ合いを継続した。ブッダの全身舎利と同じように、人間に救済や祟りをあたえ、場合によっては全身舎利になった即身仏が、新しい分身である断片

的な舎利を生み出す。これについて例をあげると、即身仏になった高名な一世行人の真如海上人 (?–1793) は、現在でも 6 年に一回衣を変え、その衣の生地の断片が聖なる身体と接触した舎利として拝まれ、お守りとして販売されている。湯殿系の即身仏の歴史の中に、1967 年から 1993 年まで活動した日本ミイラ研究グループは重要な役割を果たした。このグループのメンバーたちは、様々な行人のミイラ化した身体を分析しながら、その即身仏を作り直し、日本のミイラ伝説と実際のミイラを躯体的に復活させることによって信仰の上でも再生させた。このことから、日本ミイラ研究グループのメンバーたちは、湯殿系の即身仏に関する現代の語り部として考えられ、彼らの研究に含まれている本意について検討するべきだろう。

マテリアリティ・モノ文化

湯殿山講員にとって、ある特定の作られた物は、ただの物のではなく聖なるモノだった。例をあげると、巡礼者が湯殿山に巡礼をする前に行屋という小屋に籠もり、特別な料理道具を使用して食事を作る。それを食する事により心身を浄める修行をした。行屋の中で大切な道具の一つは火打箱だった。それを使いながら、巡礼者は別火という清めた火を焚いて神と仏のための供物を供え、自分の食べ物も料理した。火打金は火の父として考えられ、火打石は火の母として考えられた。擬人化したこの聖なる道具二つの交わりにより、湯殿権現を慈しみ養うために使う炎が生まれる。行屋の室内構造によって二つの囲炉裏が作られ、それぞれの囲炉裏に浄めた炎を安置した上で山の神へ供物を備える。例えば、米沢市の行屋の場合には、上火の囲炉裏は湯殿権現専用であり、中火の囲炉裏は飯豊山の神専用である。さらに、行屋自体は「見立ての建物」として考えることが出来る。なぜならば行屋は、村の中で聖なる山のランドスケープを象徴的に顕在化させる力を持っていた。それは、人工的な儀礼場と山の自然ランドスケープの間に存在する見立ての論理に基づいていた。行屋は、村の中にある見立てとしての湯殿山の隠喩的存在に (metaphor or true copy) 変化した。「水」と「火」は、行屋の中での巡礼者の生活にもっとも密着した要素だった。それと同時に「水」と「火」は、山のエコシステムと深い関係がある要素でもある。このことから行屋は、水と火で作られた胎内空間に見立てられ、湯殿山の体を現した水性と火性の両方を持つ「御宝前」という聖なる岩と同じ存在となった。

不在の存在・秘密性の視程

湯殿山は行場というだけではなく戀の山でもある。そのゆえんは、戀の旧字の構造から見て取れる。二つのいと（糸）の間に、言うという文字（言）が挟ま

図2 千日行の後に木食行者仏界上人が描いた湯殿権現の掛軸、明治時代。紙に墨、Andrea Castiglioni 所蔵

れており、言葉の結びを示している。これにより、湯殿山は沈黙の山として、語られない秘所として考えられていた。しかし、Michelle Serres 氏（1930–2019）が述べているように、完璧すぎる秘密はシステムの死につながる。秘密がある程度漏れないと、その秘密に基づく構造が枯れてしまう[3]。近世の湯殿山も例外ではない。たとえば、湯殿山講員が持っていた掛軸には、描くことができなかった湯殿山の風景を雲の屏風の後ろに隠すことで、その聖なる場所を喚起した。このように、湯殿山系の掛軸は直接の観 (vision) ではなく斜めの観にすることによって、湯殿山の御宝前の不在と秘密性を守りながら、その不在ゆえの存在感を現す。文字のみの掛軸の場合にも、湯殿権現の姿を文字として表現することによって、実際の姿を描くことなく山の神を文字化し、神の根本的な不可視性を示す（図 2）。さらに、場合によってこのような掛軸の作者は高名な一世行人自身だった。千日行という山籠の修行を終えたばかりの行の力を十分に身に付けた一世行人は、筆・墨・紙を触りながら、湯殿権現の掛軸を描き、自分の身体と権現の身体を融合させ、掛軸の形でこのような徳を講員に与えた。つまり、湯殿山系の掛軸は、秘密性が高い湯殿権現の身体と一世行人の清めた身体の習合を現しており、モノと人間の物理的な次元を通し、不在による存在の顕在化を具現する。その結果、御宝前の不可視は掛軸のマテリアリティと一世行人の身体により視程に変化することが可能である。たとえば龍の身体なども、御宝前の不在と不可視の媒介者として働く。蓮海上人が描いた掛軸では、龍の字体はその神秘的な動物のしなやかな姿を思い出させ、湯殿権現を喚起しながら御宝前のお湯に温まる蛇の姿も思い浮かべることができるだろう。

結び

結論として、湯殿山学に登場する五つの主な概念をもう一度振り返ってみたいと思う。まず、メトニミーは、オリジナルとしての本地仏とコピーとしての垂跡神の有効なテンションを示し、一対一の関係を乗り越えた本地垂迹思想の一種類

3. Michael Serres, *The Parasite*, trans. Lawrence R. Schehr (Minneapolis and London: University of Minnesota Press, 2007), 12–14.

を現す。トランスポジションは、全ての宗教言説の時空を超えた創造的な写し(replication)を可能にする。エンボディメントは、宗教思想の具現化だけではなく、宗教思想自体の変更、維新と危機さえ生み出す。マテリアリティは、宗教的なエージェントが人間に留まらず数多くの non-human 的なモノの大切さを指し示している。最後に、不在と秘匿性は、宗教言説の危機としてではなく宗教ネットワークを膨らませるための好機となり、宗教の伝播に関わる想像力と無限の可能性を表すと言えるだろう。ここまで検討した近世の湯殿山信仰と深く関わる五つの概念は、独自性を示すだけではなく、山岳信仰に含まれている普遍性を明らかに示している。今後この独自性と普遍性の融合を分析し、二つの現象にある相互間にある葛藤と変化を同時に研究するべきだろう。

アンドレア・カスティリョーニ
名古屋市立大学